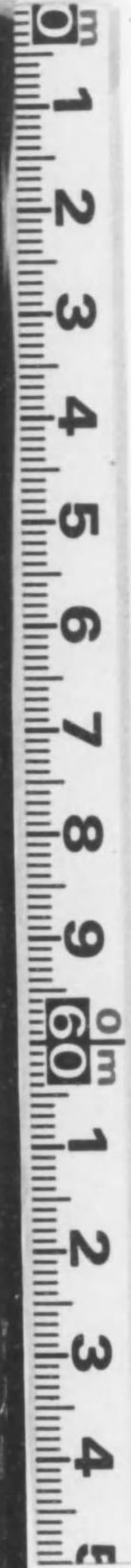


378-337



1200501453266

378  
337



始



解題叢書第一篇

源氏物語關係書解題

東北帝國大學附屬圖書館

序言

發行所寄贈本

本館所藏の圖書につき、題目を選びて解説をものし、稿を得るに随ひて刊行せんとす。希くは、些かたりども學者の参考に資し、併せて江湖に本館を紹介するもなほんことを。



昭和七年四月

378-337

### 凡 例

- 一 本篇は東北帝國大學附屬圖書館現藏源氏物語關係書を解題せるもので、和装書のみに限り、洋装活版本には及んで居ない。
- 一 解題は一般に知られてゐるものは簡にし、然らざるものを密にした。
- 一 部類別は内容によつて五部にしたが、その内部の配列は時代の判るものは年代順にした。
- 一 冊數の下に記すところは本圖書館の書籍番號で、狩りあるはその中の狩野文庫本の意味である。
- 一 書物の大きさについて特大、大、中、小記したのは本圖書館の略符號で次の如き意味である。
  - 特大、一尺二分以上 檀紙奉書杉原紙等
  - 大、八寸二分五厘以上 美濃紙
  - 中、六寸五分以上 半紙
  - 小、四寸三分以上 美濃半切、半紙半切等

### 正 誤

- 一、目次一九、圖版目次第八、本文一五頁、並に圖版第八に「竊源抄」とあるは竊原抄の誤。
- 一、本文一頁五行に「夕顔」とあるは空蟬の誤。
- 一、本文六頁十二行「十四箇條ある」の「。」を除く。

目次

第一類 本文及系圖年立

一 源氏物語 黒箱入 寫五四	一
二 源氏物語 繪入小本 刊三〇	一
三 光源氏系圖 卷物 寫一	二
四 源氏物語系圖 寫一	三
五 源氏物語年立 寫一	四
第二類 註釋書	
六 原中最秘抄 寫一	四
七 河海抄 寫一〇	四
八 源氏千鳥抄 寫二	五
九 源語秘訣抄 刊一	六
一〇 源語秘訣 寫一	六
一一 源語秘訣 寫一	七
一二 源氏物語不審抄 寫一	八

一三	源氏物語註	寫一	九
一四	悉源抄	寫五	一一
一五	孟津集	寫二〇	一二
一六	岷江入楚	寫三〇	一三
一七	源氏物語湖月抄	刊六〇	一四
一八	源氏六帖抄	刊一	一五
一九	窺源抄	寫六二	一五
二〇	源註拾遺	刊四	一七
二一	源註拾遺	寫六	一七
二二	俗解源氏物語	刊一	一八
二三	雨夜物語だみこさば	刊二	一八
二四	源氏物語評釋	刊一三	一八
<b>第三類 辭書、類纂、和歌、</b>			
二五	仙原抄	寫一	一九
二六	源語梯	刊一	一九
二七	紫文製錦	刊八	二〇

二八	紫文消息	刊一	二〇
二九	源氏四季詞寄	寫二	二〇
三〇	源氏作例秘訣	寫二	二一
三一	詠源氏物語和歌	寫一	二一
三二	源氏百人一首湖月抄	刊一	二二

**第四類 梗概書**

三三	源氏小鏡	慶長活字本一	二三
三四	源氏小鏡	活字本一	二三
三五	源氏小鏡	刊一	二三
三六	源氏物語抄解	寫一	二三
三七	源氏無外題	寫三	二三
三八	源氏物語忍草	刊五	二四
三九	源氏物語大綱	寫一	二四

**第五類 雜考**

四〇	源氏雜亂抄	寫一	二四
四一	紫家七論	寫一	二五

四二 紫家七論 (本居校合本) 寫一……………二一五

四三 源氏七論 寫一……………二一五

四四 源氏物語新釋惣考 刊一……………二一六

四五 源氏物語新釋惣考 寫一……………二一六

四六 日本紀の御局の考 刊一……………二一七

四七 源氏薰香考 寫一……………二一七

圖 版 目 次

第一 源氏物語(桐壺)……………二頁

第二 源氏千鳥抄……………六頁

第三 源氏物語不審抄卷頭……………八頁

第四 同上卷末……………同上

第五 源氏物語註……………十頁

第六 同上裏、縉紳家書翰……………同上

第七 琴源抄……………十二頁

第八 窺源抄 卷頭並に卷末……………十六頁

第九 源語梯……………二十頁

第十 源氏小鏡(慶長活字本)卷頭……………二十二頁

第十一 同上 卷末……………同上

第十二 源氏小鏡(活字本)……………同上



東北帝國大學  
附屬圖書館現在

# 源氏物語關係書解題

## 第一類 本文及系圖年立

### 一 源氏物語

寫、大、五十四册 貴重書

漆塗黒箱六個に入り、各所收の卷名が金文字で標記してある。本文は青表紙系で湖月抄と殆ど異ならず、桐壺、帚木、夕顔の三卷には次の如き朗讀の符號がついてゐる。(圖版第一參照)

上・上。上。中。中。下。下。下。下。

なほ桐壺の卷の初には「靜下より」に注意し、又御の字は 御<sub>イ</sub> 御<sub>ウ</sub> 御<sub>エ</sub> 等と區別してゐる。

室町時代以來禁中、親王家等で源氏を講義する際殆ど朗讀で所々難義の箇所のみを説明するといふ方法もあつたので、そのやうな際の朗讀法を記載したものかと思はれる。但書寫年代はさまで古いものではない。

### 二 源氏物語

刊、小、三十册 繪入 狩一六六三五



本文二十五冊（所々に給を挿入）と山路の露及系圖一冊、引歌一冊、爪印三冊合計三十冊。本文は青表紙系であるが湖月抄本に僅かに異なる。山路の露は夢の浮橋の末をうけて後人が書きついだものである。系圖は湖月抄にのせたのこは別種で三條西實隆の訂正したものである（光源氏系圖参照）。引歌は桐壺卷より順次ひく。爪印は一種の源語辭書で巻頭に源氏の解題、作者、卷名の由来等を舊註によつて記し、次に源氏の語句をいろは順に配列して解釋してゐる。解は河海、花鳥、弄花等を用ひ新しい説明はない。語數は仙源抄の約二倍に及ぶが辭書としては幼稚なものである。

此書は木下長嘯子の門人山本春正が世に出した源氏物語繪入本六十卷（本文五十四冊、山路の露一冊、系圖一冊、引歌一冊、目安一名爪印三冊、慶安三年跋、承應三年刊）によつて小形本三十冊に改めたものと思はれる。

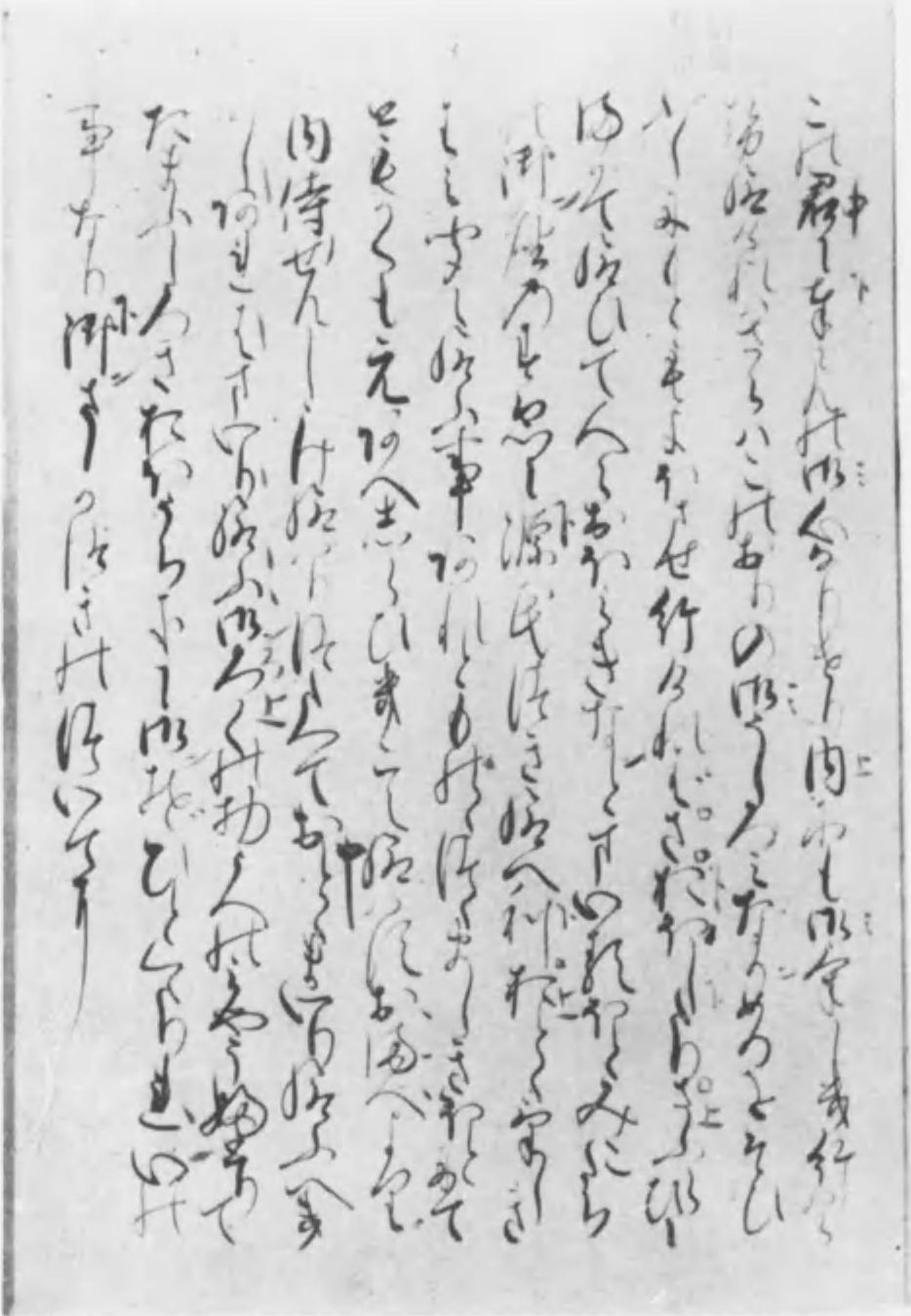
### 三 光源氏系圖 三條西實隆

寫、卷子本一、狩一八六六六

初に太上天皇、先帝、常陸宮、攝政太政大臣、二條太政大臣等二十八家の系圖をのせて人々を説明し、次に不載系圖人々として各卷毎に單獨に出る人約三百五十をあげ、極簡單に説明したものである。湖月抄附載の系圖は組織人名の稱呼等に於て相違があり又それよりも説明が簡單である。奥書に

光源氏物語系圖往々流布之古本頗亂頗多異同難辨爲備未學之廢忘去長享比各加取捨校合書一本畢而今左衛門尉親柔依數寄深切懇望之間凌老眼染凍筆定有遺闕歟親者宜令改正之而已

文龜甲子曆仲春十九日



(複製) 源氏物語 一第版圖

こある。文龜甲子(四年)に亞槐(大納言)で拾遺(侍從)たりし人は三條西實隆で、その源氏物語系圖は流布の本を基礎とし宵柏、宗祇、玄清等に相談して長享二年の春作り上げたものである。すでに長享二年及永正九年の跋あるものが傳つてゐるが又こゝに文龜の跋あるものが存するのである。小本源氏物語の系圖は此書の不載系圖人々だけを省いたものに極々些少の説明を附加したものである。

#### 四 源氏物語系圖

傳眞淵翁草稿

寫中、一册 狩二二九九二

湖月抄に附加してある系圖(天文十九年桃華宋央の奥書あるもの、前記實隆の系圖とは異なり前に太上天皇、前坊、營兵部卿宮、先帝等二十五家の系圖をのせて人々を説明し次に不入系圖人々を順序もなく百二十餘人あけなほ無名人及系圖に關係なき四五の事項を附記したもの)から「不入系圖の人々」及それ以下の部分を省いて記し、それを基礎にして増訂したものである。未だ充分に整理せられてゐない草稿であるが系圖中の人々が出る巻名を悉くあげ、原本にある説明のよつて来るまじりの本文を湖月抄本によつて示し、又原本の誤りを精細に考究して訂してゐる。例へば桐壺帝の御妹攝政北方の説明中に「藤のうらばにかくれ給ぬ」こあるを消して「わづらひ玉ふよし行幸巻に見ゆかくれ玉ふよし藤袴巻に見ゆ三行幸巻藤袴巻の間、三月廿日にうせ給ふ也」とするが如きでその増訂は本文の精讀によつてなされてゐることが著しい。題箋に眞淵翁草稿と傍記してあるがその説は時に新釋と相容れぬ所もある。

五 源氏物語年立 一條兼良

寫、大、一冊 狩五四三一

一條兼良の著述なるこゝその子冬良の永正七年の奥書によつて知られる。光源氏及薰大將の年齢を基として各年々に書中の事件を箇條書にして羅列したもので年齢を基とした各段の要領書の如きものである。湖月抄に二冊として附加せられてゐる。

第二類 註釋書

六 原中最秘抄

寫、大、一冊 狩一五〇八四

源親行が廣く諸家にはかつて源氏物語中の難義の條々を註釋し後其子義行、孫行阿等が補正したもので河内一流の秘説である。すでに群書類從で刊行せられたが此書はその類從本と異ならぬ。筆者については「清亮寫」とある。

七 河海抄 四辻善成

寫、特大、十冊 狩二一四三九

永和五年の頃四辻善成が其時までに出た諸註釋の説及師丹波守忠守の説を集成するに同時に自己の研究の成果

を註記したものである。國文註釋全書本と比べるに時に誤脱もあり又時に全書本の脱落らしい所を補ふに足るゝところもある。例へば桐壺卷十四枚裏の「かむたちめうへ人」の次に「あいなうめをそばめつ、無愛也」は此書にないが十六枚表の「世のおほえはなやかなる」の次に「なほより所なく、據、無類」の項は全書本には缺けてゐる如き類である。但全體としてみる時相違は甚しいものではない。

八 源氏千鳥抄 四辻善成談 平井相助記 寫、大、二冊 狩五四三〇

四辻善成が至徳三年七月廿六日から嘉慶二年十一月卅日まで三十七回に亘り源氏物語の講義をした時平井相助が聽聞して筆録をしながら其後も善成に問ひ質して記したものである。近年續群書類從で刊行せられ異本については先年國語と國文學誌上で橋本進吉氏の加持井宮舊藏本についての紹介がありそれと略同じものが源氏談義と題されて宮内省圖書寮にある。今此書をそれらと比較するに群書類從本よりもむしろ加持井本、圖書寮本に近くて稍それ等よりは粗なるものである。

類從本卷頭の一文は卷末に跋して存し「干時應永廿六季春下澣記之」とあること、内題が源氏御談義至徳三七廿六(類從本には源氏物語聞書至徳三年七月廿八日とある)とあること、片假名書で聲點を附してゐること(類從本は平假名で聲點がない)類從本の奥に存する源氏撰述の由來を記した一文のないこと等は略加持井本圖書寮本と同じい。なほこれらの點が原撰本に近い形であることは橋本氏のすでにのべてゐる所である、次に各卷名の下に講義の月日を記入してないこと、卷末に「後成恩寺殿三ヶ大事之外口傳條々云々の一文及これにつゞく延徳

三年秋九月日槐下桑門藤齋の奥書の存しないこと等は以上の二書と異なる。なほ類従本の「亞相之末座につらなりて一日さいへごもをこたることなかりき」は「相助その末座に」(加持井本圖書寮本はかくなつてゐる)の誤でそこから本書成立の事情も判りにくくなつてゐたのであるが此書は「相助の末座」となつて「その」の「そ」を脱落して居り意味不明となつた爲か傍に亟に註し相承の意を解さうとしてゐる。群書一覽には明かに相承の末座とある。即たま／＼その誤謬の徑路を示すものがあり、又此書は群書一覽所載の本及類従本よりは古い面目を傳へ前記二書よりは後のものたることが考へられる。なほ此書の最後に

件本兼載法橋之秘本思借之刻誦少童白地令寫之雖有文字之訛謬校合功畢 乘下叟

の奥書があり類従本が宗祇自筆本を傳へたこといふのに對し兼載の秘本を傳へたので傳來の系統を異にしてゐる。

なほ此書の書寫はあまり善くはない。類従本と比べると互に註釋の箇所の出入、註釋の相異が甚しく存し概して此書は項目が多くて説明は簡潔である。類従本は若菜の下に於て約二三十箇條が脱落してゐる外(若菜上に四十四箇條註し下は只十四箇條のみであるから脱落と思へる。圖版第二參照。此書は若菜の上に五十六箇條下に四十四箇條ある)。諸所に脱落と思はれるものがあり又類従本に存して此書にない所も往々ある。要するに加持井本、圖書寮本に次いで千鳥抄の原典の面目を類従本よりはよく傳へてゐると思はれる。

九 源語秘訣抄 一條兼頁

刊、大、一册 狩五四二四

一〇 源語秘訣 一條兼頁 (阿波國文庫舊藏本) 寫、中、一册 狩二〇二二四

一フツ、カ 右ノ字ニ 声ノフトキニ  
 白雪花藝室拂地  
 緑糸枝弱 不勝驚  
 一タイノ上 雲ノ上ノ変ニ  
 一コクノモ 曲者ニ 亦人ニ  
 一アカリタル世 上右ノ事ニ  
 一三ノ文 明石中交ノ子 白共アツノリニ  
 一リシノ年 煉流ニ  
 一コカシノシラヘ 丸箇調ニ  
 搔手 片密 水字 懸

抄鳥千氏源 二第版圖

## 一一 源語秘訣

一條兼良

(渡部文庫舊藏本)

寫、中、一冊 狩五四二三

一條兼良が其著花鳥餘情の別卷として特に有職故實に關する難義な箇所について註釋したものである。この三本は共に語句に些少の相違はあるが阿波國文庫本に第十六條を缺く外本文は大體同一で目次奥書等に於て相違する所がある。

刊本は「源氏物語之内秘事十五ヶ條目錄事」にして十五ヶ條の目錄をのせ第十六條の目錄には「外に」ミ肩書して居り十五條の末には類從本に見える文明十三年の奥書がなくて、

後成恩寺奥書

唯一子相傳之秘説也堅可禁外見者也 判

この兼良の奥書及明應六年書寫の由の奥書がある。

阿波國文庫本は目次に相應の錯亂もあるし本文の書寫も比較的粗雑で善本ではないが第十六條がなくて二種の奥書が記されてゐる。第一は即此書のもので、

後成恩寺奥書

唯傳一子之秘説也堅可禁外見者 御判

この兼良の奥書及延徳二年に英因法師に附屬する旨の奥書である。第二は他書の奥書が附記されたを覺しく唯傳一子之書也不可出門外付囑中納言中持了

文明九年二月 日 老袖豊恵 筆右

この兼良の奥書及文明十八年の實際の奥書と天正十年の細川幽齋の奥書とである。

渡部文庫本は目次を記さず第十五條の後に兼良の奥書があり第十六條（桂宮の註）の奥には

此桂宮之註一條院冬良御自筆也花鳥餘情の別註此外無之十五條に一ヶ條を加へ十六ヶ條 云々

とある。

以上によつて各其傳來が異なるといふ事の外に第十六條を缺く阿波國文庫本の如きが恐らく兼良の原著だらうと推測される。而して桂宮の註については花鳥に「別にしるすべし」とあるから兼良の考説ではあらうがそれを冬良が此書の後に附記したものと思はれる。

一二 源氏物語不審抄 飯尾宗祇 寫、中、一册 狩五四三二

宗祇が源氏中の解釋困難な百二十餘箇所について註釋したものである。但そは故實有職等の難義のみを釋するのではなくて語句、文意、文脈の解明が主となつて居り時に數行に亘る文を抜き出して註してゐる。奥書

此一册宗祇法師抄出之所也命可一覽由其後下向關東於相模國辛去尤歎而已

かたみともその世にはぬこころまで

ふかくかなしき筆のあまかな

俊通富小路

依て思ふに此書は宗祇が八十歳で越後に旅し關東に出た其旅立の前に富小路俊通に附托したものであり又書中に



源氏物語不審抄卷頭 圖版第三

此一冊之紙は師抄出の紙也今可一覽  
中と後下白岡東林の換出率を可  
數而已

かゝる

ものさし

こゝろ

ぬくま

そよ風

後通



雨夜談抄（文明十七年六十五歳の時の作）のこもも見えてゐるので晩年の作であらう。

なほ此書に甚だ紛はしいものに源氏物語不審條々（圖書寮に二部ある）若くは不審抄出（源義辨引、群書一覽所載）といふ書がある。共に宗祇の書であるが全く別種である。（圖版第三第四参照）

### 一三 源氏物語註 三條西實隆談、公條記及補

寫、美濃全紙綴一 貴重書

楮紙の全紙七十一枚を假綴にしたもので所々虫が喰ひ文字が不明である。表紙の右方に題して「實隆源氏註」  
としその左に「柏、笛、鈴、霧、法、幻、匂、梅、竹、」と註記あり右方には朱で「遣遙院源氏註草稿一卷自柏木至竹河紙  
數七十一、裏遣遙院等宛緝紳家書翰」とある（狩野亨吉博士の識語であらう）。柏木から竹河まで九卷の註では  
あるが竹川は只一枚きりである。當時の書翰の裏面を利用した草稿で時に抹消もあり又書入も多い。その註釋は  
殆ど細流抄と異ならぬ。増補された部分が時に細流にないとか或は歌の一二句位を記してあるのが細流では全部  
記してある如き些少の相違は存する。思ふにこれは細流抄の原稿なるべく上述の些少の相違は原稿と清書との間  
に存するものとして敢て不思議とするに足らぬ。なほ各卷末に記された増補で符號を以て然るべき挿入箇所を示  
してあるものが現今の細流では正されてゐる。こもも亦草稿たるこもを示す。なほ各卷の終りには書記の年月が記  
してある。

横笛、大永七十廿六了 鈴虫、大永七十廿六了

夕霧、大永七年十一月十六日 御法、大永七十一年廿五日了



幻、大永七臘五日了  
紅梅、大永七臘九日了  
匂宮、大永七臘七日了

増補の部分で年月を記してあるものが四ヶ所(天文二年、同九年、同十九年、同二十一年)ある。殊に夕霧の卷末に増補した四箇の註(國文註釋全書本では四五八頁下五行より十七行までの正しい所に挿入してある)の後には「天文八、六二日對宗也讀之時用此義也」とあり、更に今一つ同卷末にある増補(これは今の細流に記さぬ)の後に「天文十九年十一月廿九日講之了」とある。よつて筆者は此書をもこゝして少くとも二回講義をしたこゝがあり、其際新なる考を記入したのである、此書が細流の原稿とすれば實隆の説を公條が筆録したのであるこゝは細流の實隆の奥書中に「此抄胸臆之愚談公條卿卒爾之間書也云々」とあるので知られるし増補が公條の自説である事は實隆の死後に記入したものがあることから知られる。

なほ細流には公條の奥書に「此一部永正十年受庭訓畢彼聽書詞短心不足更非可令外見不能清書送數年半爲蠹魚之巢爰或人難去所望之間如形加清書終一部之功(中略)干時大永第八仲春十九日」とあり次に天文五年に能州の刺史へ再度此書を送る旨の公條及實隆の奥書がある。永正の書は「詞短心不足更非可令外見」とあり又「半爲蠹魚之巢」となつてゐるためである。今大永八年に能州へ書送るに際してそれを書改めた控へが此書かと思はれる。各卷末の奥書の日附からみて全部完結するのは大永八年春の頃と見られるからである。此書は長く三條西家の細流の原本として藏され天文五年能州へ再度書送つた原本ともなり、又談義の際の草案の役をもつこめたものと思はれ、源氏研究史上意義深きものがある。(圖版第五及第六参照)



富樫 註語物氏源 五第版圖

草書家伸繪英露夕註語物氏源  
六第取圖

一四 采源抄

寫、中、五册  
TB  
1-7  
14

一枚二十四行書墨付全部四五枚源氏全卷に亘り語句を摘記して簡潔に註釋した片假名書の書で卷末に女房裝束抄を「弄花奥ニアリ」に記して僅かばかり附載してゐる。卷頭に總説があるが河海花鳥等の諸書にみえる以外の説はない。註には河海、花鳥、千鳥、弄花、一葉、和秘、一禪(兼良説)、一註(同上)、宗祇註、類字源語等を用ひてゐる外實際、宗長、宗牧其他の説を聞き集めて居り私云こした自説も時に存する。聞書の部分には此書以外ではみられぬものがあり特に注目すべきは清濁の聲點をつけ實際、宗長、宗牧等のよみくせの異同を仔細に示してゐる點である。例へば

- 一 そはつき 側付ト書、ツ文字空濁、長同、牧清テヨム宗碩説ナルヘシ(簾木)(因に云、空は堯空即實際、長は宗長、牧は宗牧、宗牧は宗碩の門人)
- 一 つつしり 空、長同清、牧濁宗碩説歟(簾木)
- 一 はや 空此歌を引給時スミテヨミ給へり(君がすむ宿の梢をゆくゝこの歌)地ニテハ濁、長イツモニコル 牧同(夕顔)
- 一 なをし ナフシトヨム空、ナナシ長(簾木)
- 一 ななり ハネスヨム空、ナンナリト長(簾木)

の如くである。なほ大うちきの事、小うちきの事の條の書翰體の註には此註は東山左府以書被相尋一條前攝政殿

仍令勸付給之文章寫之也。タ類卷の「かやうにくたくしきこまはあながちにかくろへしのび給ひしもい  
まほしく云々」の一文を卷末に「九條殿抄に」にして特に註釋した一文をのせる等當時の源氏研究の事情を物語  
るものがある。

著者は明記していないが上記の人々を交つた連歌師なるべく又審木の「さしあたりて」の註の終に永祿六於堺校  
合之時記之にありからそれ以前に出来て居たことがわかる。(圖版第七參照)

一五 孟津集 九條植通 寫、大、二十册

題簽には孟津集とあるが孟津抄と異なる。著者が三條西家の源氏學をうけ更に諸書を研究し自説をも加へ  
て天正三年に完成したもので内閣文庫には五十四卷本があるが二十卷本が原形である(同じ二十卷本でも本書と  
圖書寮本とでは各卷に配當されてゐる源氏の卷々は一致してゐない)。本書は三河國刈谷藩の村上忠順舊藏本(令  
孫愛知縣碧海郡刈谷町村上義保氏所有)を影寫したものでその書は徳川時代の初期の筆寫と思はれる(表紙に良  
云とあるは筆者であらうが如何なる人が審かでない)。又湖月抄所載の註に比べると多少出入がある。なほ村上本  
は第十二卷及序跋を缺いてゐるので、影寫の際第十二卷及序は圖書寮本を、跋は内閣文庫本を寫して補ひその總  
紙數千二百九十餘枚に及んでゐる。

序跋には著者の源氏研究を(従つて本書の成立の由來を)語るものがあり又卷頭には十餘條の總説があるが主  
として河海抄の「料簡」により又繼に弄花、花鳥、實澄の説(内閣本には三條亞相實隆とあるが村上本の實澄の

又水原る口史  
後世能物語序ももを都もよとせむをゆ  
るむら中るのほはわたりとちりゆま  
ほむらひけぬるのゆりと字のわたりと  
後漢書曰 金男如虎猶恐其狂 主女如鼠恐其武  
相壺 原漢書曰 十二威一也  
外題 意アリ 詞シる奇クヤヤト 詞シる奇クヤヤト  
ナツル天台の清法門アリ 一六有門ニニ空門三ニ亦有  
亦空門ニニ非有非空門ニニ切言教ハ此ハ清ニ出ス  
是ニヨリテ故ハ清ハ別立法性スルヲ眞實ノ道理  
言教ノ外ニニ物ハ相壺大ニ詞ヲ取テ付スルナリ  
後 玉、為春切 六十七卷

抄 源 弄 七 第 版 圖

説き出した方が正しい)等を用いたもので殆き著者の新説を認むべきものはない。註は本文を摘出して記しその大部分は河海、花鳥、弄花、宗祇の簪木註、三條西家の説等を用ひ交ふるに自説を以てした。自説では時に評論的態度も見え(例へば「此詞殊に哀也云々餘情を思ふべし」)とか「かやうな引歌此物語の妙也」とか「此歌ちみ緩急なる歌也」等云ふ如し)或は文字の清濁、文の接続等にも注意し又稀に文意文脈有職故實等に就ても新なる考慮を致してゐる。併し全體としてはその自説も従來の諸註釋を少し精しくした云ふに止り三條西家の研究をあまり出るものではない。たゞ細流抄明尾抄が殆き諸註釋書の原文を引かず自説を區別なしに簡明に要を記すを旨としてゐるのに比べるとこれは諸書から原文を引き又自説も立て必しも記述は簡明を旨としてゐない等著述の態度に相違が存する。即前者には一通りの理解を易からしめることに意を用ひたさいふ啓蒙的傾向が存するに對し此書はその述作の態度が幾分研究的である云へる。貞徳は戴思記で「御外祖父道遙院殿(實隆)の源氏物語御傳へあり稱名院殿(公條)に再問まで極め三光院殿(實澄)に御穿鑿度々に及びしかば此御物語の淵底を通達し給ひ云々」と著者の源氏研究の功を述べてゐる。

この植通の説は貞徳を経て季吟に傳り湖月抄では細流に次いで重んぜられて居る。室町末期に歌人連歌師等の間に多くの源氏註釋書が出た中でも尊重すべき一業績と目すべきものである。

一六 岷江入楚 中院通勝 寫、特大、三〇冊 丁1-15 B7

源氏諸抄大集成の志のあつた細川幽齋の委託をうけて中院通勝が編著し慶長三年に成つたものである。巻頭に

自序及發端があり卷末には奥入、河海、花鳥、弄花、細流、年立等の奥書、幽齋の跋文及次の如き山科頼言の奥書がある。

岷江入楚此十有餘年命家僕書寫篝火敬言朝臣書寫又自野分到藤裏葉自若菜下到鈴虫自幻至竹河手習夢浮橋隼人  
佑秀昌書寫原本野の宮家此内自明石到常夏藤谷家本也適書寫終訖

寶曆十二年仲冬

大宰權帥頼言

即言繼より七代の孫山科頼言が書寫せしめた本で松平確堂の藏書印がある。

發端には源氏の解題を主とし紫式部の事、諸本諸抄の事、河海花鳥の序等を記す。各卷毎に年立を分割してその卷の初にのせ註は書中の語句を摘記して河、花、弄、祕(公條の説)、箋(實枝の説)等記して集成し、所々に聞書及自説を交へてゐる。其集成は頗る精しく自家の考説も妥當なるものが多い。なほ此書を名著刊行會本岷江入楚と比較するに時に脱落の箇所もあるが又刊本の脱落を補ふ所も少くない。殊に刊本は河、弄、箋、私等の標記を脱落する事が甚しい。

### 一七 源氏物語湖月抄

北村季吟

刊、大、六十册

狩五四二七

註釋のある本文五十四册、發端一册、系圖一册、年立二册、表白一册、雲隱説一册合計六十册で延寶元年の跋文があるが全部が刊行せられたのは延寶三年だといふ(石倉重繼、北村季吟傳)本文は青表紙系統で異本と校合してある。發端は源氏物語の解題を主としたものであり、表白は紫式部の妄語破戒の苦患を救ふ爲めの佛への願

文で安居院法院聖覺の作と云はれてゐる。雲隱説は雲隱の卷に對する古來の疑義をのせ、案を加へ、こは名ばかりあつて本文はないものとして雲隱六帖の存在を否定したものである。系圖年立については其項ですでに記した。註はや、精しい頭註と簡單な語意語脈等を説いた傍註とからなり主として諸註釋書の説を集め間々自説を交へてゐる。其集められた説も自説も當時の學問意識からみる時は穩健妥當なものである。

### 一八 源氏六帖抄

刊、大、一册 狩五四三三

雲隱の卷は名のみで本文はないと云はれてゐたが何人か雲隱六帖なるものを偽作し式部が奉納して置いた石山寺の寶藏から出たとして世に行はれるに至つた。それは源氏が晩年出家して歿するに至るまでを拙劣なる文章を以て描いたもので其六帖の卷名にも異説があつて一定してゐない。此書は雲がくれ、巢守、櫻人、法の師、雪雀子、八橋の六帳の本文を摘記して註解したものである。但此本には紙數四十七枚のうち十九枚の脱落がある。延寶九年刊。

### 一九 窺源抄

石出吉深

寫、大、六十二册

五十四帖の中箒木、若菜上、若菜下、角總、寄生、浮舟、蜻蛉、手習の八卷を上下二册に其他を一册にし六十  
二册並付約四百枚に及ぶ詳細な註譯である(但夕霧の卷に一部の脱落がある)。序も跋もないが桐壺の終には延  
寶七年九月十五日記之畢、石出常軒。箒木には延寶七年十月廿日記之畢、石出常軒といふ如く各卷毎に著作終了

の年月を記し夢浮橋は六年四月後の貞享二年十二月晦日に終つてゐる。其間病氣火災等によつて久しく斷絶するこゝ三回に及んでゐる。

本文は青表紙系ではあるが湖月抄本とは異なり時にそれを訂すところもあり又その湖月抄本にイ又は青表紙本と記してゐる所も一致するところもあるが明かに不用意の誤脱も存し、概してよいものではない。その註釋は本文を適度に切つて記し、諸抄の集成に交ふるに稀に師垣齋の説及夥しい自説を以てしたものである。

註に引用してゐるのは岷江入楚を第一とし河海、花鳥、明星、細流、簑（岷江より引く）弄花（岷江より引くが如し）等が多く其他其名を記して引くものに奥入、萬水一露、和秘抄、最秘抄、宗祇註、仙源抄、辨引抄、孟津抄、紹巴抄、休閒抄、裝束抄等がある。その博引は遙かに湖月抄に優り又諸説を集めて批判して行く態度は特に著しい。例へば夕顔の巻の「ふくいこくろうして」について古來「ふくりこ黒うして」を解する説に「服いこ黒うして」を解する説があるので先づ前説をみる最秘抄、河海、花鳥、至徳記等を詳細に引用し次に「細流曰右近が服衣の色深き也説々あり不可用之弄同之、明星曰、花鳥説非か云々簑曰河海異説不用之岷曰河海に主君の服を着す出仕に不憚云々朝廷の事猶如此況私にをいてをや」を後説に贊するものをあげ更にそれらの説の淵源を覺しき仙源抄を引き著者云はれてゐる長親を説明して後「長親の説を用ひて弄花、細流、明星、岷江等に河海花鳥の義を破られたりを聞えたり」を推論し彼自身もそれに贊成する口吻であるが更に仙源抄の論據を検討して「大監物光行俊成卿と相談してふくらかに肥たる方に極めたることならば、俊成卿の女、親の説を不用して着服の義を用べき事にあらずを仙源に註し給ふ尤也、乍去人々の心により父子の義相違の事なきにしもあらず既

源氏物語

桐葉

源氏物語名小引四巻一巻二巻三巻四巻五巻六巻七巻八巻九巻十巻十一巻十二巻十三巻十四巻十五巻十六巻十七巻十八巻十九巻二十巻二十一巻二十二巻二十三巻二十四巻二十五巻二十六巻二十七巻二十八巻二十九巻三十巻三十一巻三十二巻三十三巻三十四巻三十五巻三十六巻三十七巻三十八巻三十九巻四十巻四十一巻四十二巻四十三巻四十四巻四十五巻四十六巻四十七巻四十八巻四十九巻五十巻

抄 源 寬 八 第 版 圖  
(末卷冊六十二第に並頭卷冊一第)

貞享三年十二月晦日記之畢 石出常新實名吉深

に最秘抄は光行が子親行が作也、最秘抄に初は光行が説ふくりこ肥たるを用ひて後に愚案に着服の義可然と書たり是文の説を不用此類多し俊成女着服の義を用たる程に俊成の説はおほつかなしこもいひがたし云々」と疑を存してゐる。その集成と批判は殆ど一論文を形成してゐるのである。

かくの如き特色と共に或は語句の細微なる點にも着目して註し或は一文中的特異なてにをはの効果に注目し或は文意の論評に及ぶ等頗る細密で且自家の見識を立てる所が著しい特色をなしてゐる。併しその精細な註釋にも屢無用の穿鑿と思はれるものが存し又文意の理解も湖月抄のすなほなのに及ばず彼が立てた自説も妥當性に乏しいものが多くその論述も往々冗漫の嫌がある等學問的洗煉の度に於て概して湖月抄に及ばない。

なほ此書は著者撰述の頃に書寫されたものと思はれるが内閣文庫に存する十三冊の端本に比べるに多少の脱落も存する。(圖版第八參照)

二〇 源註拾遺契冲

刊、小、四冊 狩五四三四

二一 源註拾遺契冲

寫、大、六冊 狩五四三五

語句を摘記して註釋したもので元祿十一年に成る。古註の説をあけてその誤を訂し又直ちに自家の所説をのべてゐる。刊本は「天保五年仲秋刻成」とあり可なり本文は完全してゐる。寫本は僅かではあるが刊本よりは誤が多い。



三 俗解源氏物語 梅翁

刊、大、一册 狩二二九九三

著者がかつて書いた若草源氏物語（簿木の末より書く云ふ）より前の部分即桐壺の卷と簿木の雨夜の品定の少し後までを俗語譯したもので寶永七年の自序にその旨を記してゐる。

三 雨夜物語だみことば 藤原宇萬伎

刊、特大、二册 狩五四二一

明和六年の自序安永四年の上田秋成の序があり安永六年に刊行さる。宇萬伎在京の日或人の求により所謂雨夜の品定「雨夜はれまなきころ」から「はてはあやしきこもになりてあかしたまひつ」までを註したもので、簡単な傍註稍精しい頭註及び文意を明にする爲め本文中の所々に挿入した補充文ミから成り難解な此部分を至つて了解し易くしてゐる。

二 源氏物語評釋 萩原廣道

刊、大、十三册 狩二二九二八

首上（嘉永七年の自序及總論上）一册、首下（總論下及凡例）一册、桐壺より花宴まで八卷の註八册、語釋一册、餘釋二册、合計十三册。總論では廣く源語に關する諸説をあつめて一家の見を立てゝゐる。本文には段落、テニヲハの首尾語脈指示のしるし等をつけ、頭註は語句文意を註し又文の情趣をこくなく他書にみられぬ所があり、傍註は或は假名に漢字をあて又しばしば俗語を用ひて平易適切なる解釋を下してゐる。語釋は花宴までの各

卷の語句を餘釋は各卷の文意解しがたきものミか有職故實に關する類等を釋して精細である。

第三類 辭書、類纂、和歌

二五 仙源抄長慶院

寫、大、一册 狩五四三九

長慶院が水原抄、紫明抄、最秘抄の註の要を簡潔にしていろは順に排列せられた最初の源語辭書で卷末に院の御跋文がある。此書には群書類従本にある明魏の跋、天正の奥書等はなく内容も甚しくそれと異なる、概して類従本より項目少く註も簡潔である。例へば伊の部に於て類従本にある項目は六六、此書は四八、其中兩者に大體に於て通ずるものが四〇、此書にのみあるもの八、類従本にのみあるもの二六に及ぶ、類従本は「繕寫之」ミある故多少明魏の手入れがあるので此書の方が却つて原撰本に近いのかとも思はれるが異本の多い書であるから遽に斷ずることは出来ぬ。

二六 源語梯（橋千蔭書入）

刊、小、一册（但三册台本） 狩五四二二

早く刊行されてゐたものに中井竹山の源語梯辨が附加されて天明四年に刊行されたのである。その辨によれば元來五井純禎の著源語詰を何人か所々省略或は敷演をし題名を改めて刊行したものであるといふ。難語雅語等を先づいろは順に配列しその内部を更に虚詞人事、天地時候、人倫支體、生殖氣形、服食器財、に細かく分つて配

列して各語を解釋した辭書である。多くはその語を含む本文を引き平易に時に俗語を以て説き古く出た仙源抄、類字源語抄等よりは判り易い。なほ上欄には橘千蔭の語釋について朱の書入がある。(圖版第九参照)

三七 紫文製錦 橋本稻彦 刊、小、八册 狩五四三八

文化四年木居大平序。文化十四年刊行。源氏中の作文の助となるべき箇所を抜き春夏秋冬戀雜の六部に分けその各を更に細かく分類して配列してゐる。凡例に「此書は中むかしの言葉つきをまねびて文か、むさするうひまねびの人たちのためにももてものせりさればつねに文か、むにたすけなるべくおほゆる事さもをばおほかたもらすこまなく集めいませり」云ある。

三六 紫文消息 橋本稻彦 刊、小、一册 狩五三六八

文化四年自序、源氏中の消息の文章を抜き題をつけ往復の人及場合を記して巻の順に配列したもので古の書をよくみぬ初學の人の爲に書いたきてその文には傍註を施し稀には頭註を加へてゐる。

三元 源氏四季詞寄 寫、小、二册 狩二二二二六

源氏物語中から四季の風物に關する文章を抽いて、例へば初春、子日、踏歌、鶯、春雪、殘寒等三項目を立て、配列したものである。



抄 語 源 九 第 版 圖

### 三〇 源氏作例秘訣

寫、大、一册 狩五四二五

初に詠格詞寄として源氏中の詞で歌に詠まれるべきものをあけ次に各卷順を追つて歌、文章を標記しそれに関して詠んだ歌をあけたもので中には標記された文句をよんだのみで源氏物語には無關係のものもある。その歌は古くは平安朝からはじまり徳川初期に互るが室町末頃の人々のが比較的多く中でも實際の詠が最も多い。卷末に次の奥書があり蒐集者及相傳の由が判る。

此二卷者源氏物語本歌詞取用作例也以敬齋敬義齋多年所書集者也後敬義齋相傳書寫畢

干時安永六年六月 陶々齋四達

右者敬義齋相傳陶々齋之寫本書之、め畢

寛政二庚戌霜月念五 光豊

### 三一 詠源氏物語和歌

寫、中、一册 狩四六九六

桐壺は仙臺少將齊宗朝臣、審木は長岡侍從忠精朝臣等其當時の諸侯、藩士、學者、女人、僧侶等五十六人の源氏各卷を詠する歌五十五及漢詩一を集めたものである。此人々の中には、林大學頭衡、清水濱臣、屋代弘賢、塙保巳一等の名も見える。なほ表紙に書名ならんで伊豆權現法樂詠歌あり、後部に文化十五年三月松平樂翁伊豆權現法樂列侯詠歌三十餘首を記載してゐるが源氏には無關係である。

三 源氏百人一首湖月抄 黒澤翁滿 刊、大、一册 狩四八二三

天保十年十二月刊。卷頭に橘守部外二人の序及著者の源氏の解題、式部の傳、此書を作りたる理由なきを記した總論がある。其中に「源氏物語中なる人々の歌をも一人に一首づゝあけて傍に其詠人の小傳をしるし歌の註解をなし悉く繪を加へてひたすらかの小倉百人一首に習へる物也」とある。

### 第四類 梗概書

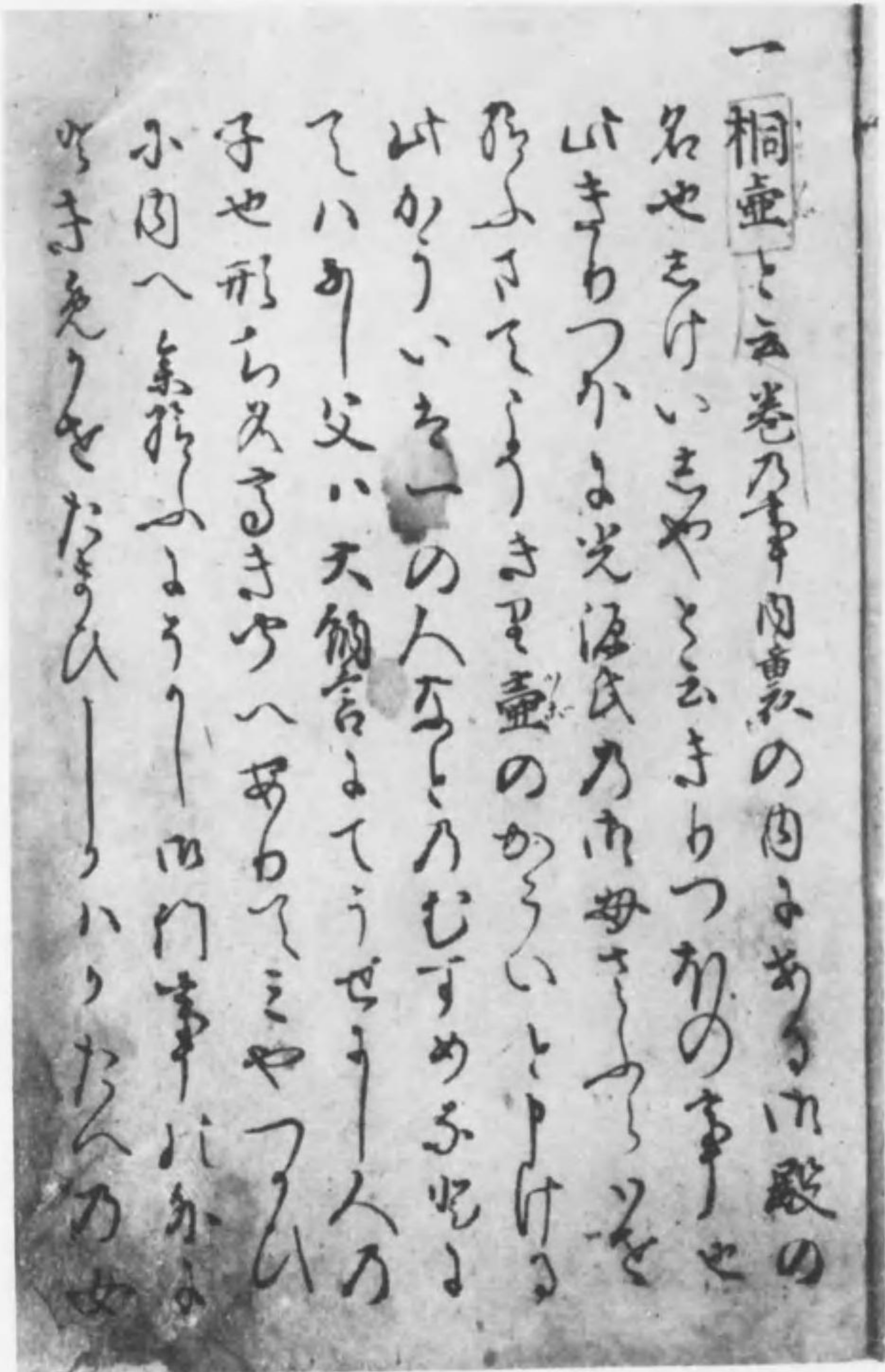
三 源氏小鏡 藤原長親 (慶長活字本) 刊、大、一册 貴重書

四 源氏小鏡 藤原長親 (活字本) 刊、特大、三册 狩一五〇八五

五 源氏小鏡 藤原長親 (繪入本) 刊、中、三册 狩一二九九一

藤原長親が足利義持に献上した最も古い源氏の梗概書で、此三書共に群書一覽にみえる總論のごとき部分を缺く。各卷の要領を簡單に記し所々に書中の語句を抽出(歌、連歌に資せんごのためか)してゐる。

慶長活字本は表紙内題共に源氏小鏡上下とあり目次も全卷のをのせてゐるが行幸の卷で止み、慶長十五年十二



頭卷本字活長慶 鏡小氏源 十第版圖

十二月のちおわらうのへんをきく一紙  
たししり互決はるれいんよこゆさ  
をいほ山 朝雪・ふゆあふか  
り事あるし

寛長十五年十二月日書之

一さむつかとりふまれのり内のりのうらにある所  
らんれ若あをまけいしやと云をきりばりのあま  
あのみつかにひふ源氏此母さやうり勢竹ふ  
所てあをきり所傳のあうのとまやけまびくうぬ  
を一の人なと此流ひをめ方とまきハ明きうあま  
てまやけむまうちハまの里まひしそりあま  
あといけりにとさめく勢竹ひしハくこハ乃女あま  
かうのみやはあそ孫さうまう勢竹とにわつま一あ  
これかうのれはらうにひてあませまうまのま三ま  
あを竹ふす内のあまはるまううぬく勢竹あま  
やまのうまをけまひしあまのうらあて人のから勢竹  
なをひく事あけまはひせぬりくまとへりて

(本字活) 鏡小氏源 二十第版圖

月日書之この奥書がある。次の活字版は天和、寛永の頃のものらしく繪入本は更に後のものである。此三書は互に相應な相違があり文に出入する所が少くない。只慶長本はその文の結構稍繪入本に近くてそれよりも簡古粗雑時に誤脱もある。繪入本は江戸文林堂須原屋茂兵衛改正とあり意味が通じやすく整理せられてゐる。第二の活字本は他の二者とは異なる系統の書で意味不通の所もあり、善本とは云ひ難い。(圖版第十乃至十二参照)

### 三六 源氏物語抄解

寫、特大、一册 狩二〇一二六

源氏の梗概書的一種で小鏡の一異本と云へる。但し或は敬稱を少くし或は文に省略を施し或は又一文を除く等稍甚だしく手入をしたもので亂雑にされた小鏡といふ趣がある。徳川初期頃の書寫らしい。

### 三七 源氏無外題

寫、中、三册 狩一八六六四

小鏡よりは精しい梗概書で源氏の文を縮少した形ではなく説明的である事は小鏡と異ならぬ。上巻の終に無外題上終 右作者不知之

天和 卯仲秋上澣一讀畢 紹之判

墨付七十六枚上巻和歌數百七十八首外引歌四十五首

萬治元年初冬中旬 定勝

とあり中巻下巻共に同じ要領の奥書がある。

三 源氏物語忍草 北村湖春 刊、大、五册 狩五四二八

天保五年の成島司直の序、昌成の跋があり装釘は風流になされてゐる。小鏡の約二倍の分量に源氏の大意を書いたもので此種の梗概書中で最も巧みに書かれてゐる。

三 源氏物語大綱 寫、大、一册 狩二〇二二七

巻頭に源氏述作の由來、此物語の趣意等を舊説によつて記し次に源氏の梗概を記す。小鏡とは異なり全然別種の書であるが分量は同じ位である。

第五類 雜考

四〇 源氏雜亂抄 寫、大、一册 狩二〇二二五

内題に源氏雜亂之鈔宗祇註之とあり、巻末に次の奥書がある。  
右源氏雜亂鈔全部一册者宗祇以自筆本寫之者也

永祿二年秋吉辰

雜亂之抄 元祿八末春書寫之 富喜 長富

此書は前半(十七枚)と後半(二十五枚)と内容を異にする。前半は源氏の卷々の次でが所々亂れて心得がたく特に薰中將の卷から推が本までの五卷は悉く雜亂して分別しがたいからきて其五卷にわたり薰の稱呼の變化から官位昇進の次第を考へこれを中心として其他の人々の官位の昇進をも併せ考へてその卷々の年代關係を考定し更にやさり木の考定を追記したものである。此部分には別に種玉編次抄と號して一部の書となつてゐる。後半に於ては宗祇肖柏等の間に對して兼良の答へたものを記したのでその問答は大體に於て弄花に「一答は文明第九宗祇法師所々不審問題後成恩寺禪閣答也一勘は文明第十二庚子季春肖柏尋申禪閣條々以彼自筆被注付」とある一答一勘に相應する。なほ此前後の中間に宇治昇進雜亂、西三條殿御作と記してあるが此部に相當する考説はない。後半の問答の部も何の斷る所もなく記し後の方に桃華坊一條禪閣之註とあつてそこから帚木、夕顔、紅葉賀等の順に書かれ前後錯亂してゐる。

四一 紫家七論 安藤爲章 寫、大、一册 狩五四三七

四二 紫家七論 安藤爲章(本居校合本) 寫、大、一册 狩五四三六

四三 源氏七論 安藤爲章 寫、大、一册 狩五四二六

巻頭に紫式部の系圖をのせ次に才德兼備、七事共具、修撰年序、文章無雙、作者本意、一部大事、正傳説誤の



項目を立て、論述し、舊説を排し紫式部日記を引いて作者について初めて根據ある説を立てたものである。元祿十六年に成り式部傳として傑出したものであるが評論は儒者的見解に立つてゐる。

第一本は伴資矩、藤原治之の跋があり、第二の本居校合本はそれの外に尙友軒牧月の奥書、享保二年の篤敬齋曲悒の跋及次の如き本居の奥書があり本文の上欄には所々本居の書入がある。(但自筆ではない)

寶曆三年癸酉仲秋十日於平安寓居倉卒書寫焉

明和二年乙酉二月晦日繕寫終業

神風伊勢意須比飯高郡舜庵本居宣長

第三の源氏七論には第一本にあつた跋の外に寛延三年の今村義忠の跋がある。此三本は所々多少の出入があるが今これを國文註釋全書中の紫女七論に比べるに本居校合本が一番それに近い。

四 源氏物語新釋惣考

賀茂真淵

刊、小、一册 狩二一四四一

五 源氏物語新釋惣考

賀茂真淵

寫、大、一册 狩五四二九

源氏物語新釋の卷頭の惣考即源氏、物語ふみ、此ふみかける人、氏やから、學のさえ、用意、ふみのさま、本意の八項目について説く所を一冊としたものである。刊本の跋に「賀茂翁源氏物語新釋惣考一卷、橋本稻彦がつたへたる本を文字の誤なきをたゞしあらためてかき清め畢ぬまきに文化十三年春正月浪華石津亮澄」にあり上欄

には玉の小櫛の拔萃をのせてゐる。寫本は惣考の次に源氏物語新釋例をのせ次の一文を記す。

以他筆うつし候隨意あやまり多く見え候重而改ため候はん外にはゆめ／＼な見せ玉ふみ師の大人のかたくいさめ玉ひしはや

清水 おもこ

有 み ち

此二書は多少出入する所があり、眞淵全集本に比較するに兩者共僅かの誤脱がある。

六 日本紀御局の考

藤井高尙

刊、大、一册 狩五三八五

文化十年刊。石田千穎の序及竹村尙孝の跋がある。式部が日本紀御局と呼ばれた所以を考へ一種の新證據説を樹て、日本紀は國史を意味し此物語は證據を日本後紀續日本後紀等にこつた故一條帝が日本紀をこそよみ給ふべけれと仰せられたのだとし光源氏は嵯峨、桐壺院は桓武、朱雀院は平城、冷泉院は仁明帝に據るこして類似の點を考證したものである。

七 源氏薰香考

藤原明恒

寫、大、一册 狩七六九四

奥書に文化十五戊寅年二月書藤原明恒撰とある。著者は多年香道に心を用ひ源氏の註釋書河海、花鳥、弄花、細流、明星、孟津等を見且薰香の諸書を検討して得た所を忘失の爲めに記す云ふ。先づ源氏中の繪合及梅ヶ枝の卷の薰香に關する部分の本文を記して註釋し、次に六種の考、源氏物語六種薰物之考、後伏見院宸翰薰物方、後

源氏物語關係書解題

二八

小松院御撰薰物六種方、拾芥抄六種薰物方等を記して本書を終へ附録に各種薰香の處方を精しく記載してゐる。

(文學士 重松信弘稿)

昭和七年四月二十七日 印刷  
昭和七年四月三十日 發行

發行所 東北帝國大學附屬圖書館

東京市麹町區有樂町二丁目六番地

印刷所 國際出版印刷社

東京市麹町區有樂町二丁目六番地

印刷者 笠井朝義

露光量違いの為重複撮影

源氏物語關係書解題

二八

小松院御撰薰物六種方、拾芥抄六種薰物方等を記して本書を終へ附録に各種薰香の處方を精しく記載してゐる。

(文學士 重松信弘稿)

昭和七年四月二十七日 印刷  
昭和七年四月三十日 發行

發行所 東北帝國大學附屬圖書館

東京市麴町區有樂町二丁目六番地

印刷所 國際出版印刷社

東京市麴町區有樂町二丁目六番地

印刷者 笠井朝義

378

337

終